書評

ミニ・コンピュータ入門

R. H. エックハウス Jr. 著
中西正和 訳

培風館　A5　上 208頁　1978年　下 240頁　1979年

本書はDEC社のPDP—11を例にとった“ミニ・コンピュータ入門書”ではあるが，内容的には決して，PDPやミニ・コンだけのものではないことを最初に言いたい．なぜなら，私自身の立場上PDPを使用したことはまったくないが，本書を実に興味深く読むことができたからである．コンピュータを改めて勉強したいと思っている人やコンピュータ教育の教材を捜している人にとって恰好の読み物ないしは教材となるであろう．

題名から察しがつくように，上下2巻を理解すれば相当手の込んだレベルまでPDP—11を動かすことができるようになる（そういう意味では“マニュアル”）だろう．とくに下巻6章の入出力プログラミングの部分は，ミニ・コンのミニ・コンたる所以であり，コンピュータ・システム（I/Oを含んでの意）はこんなふうにして動かすのか，と目の前が明るくなること請合いである．

しかし，まえがきにもあるように本書の目的とするものはPDP—11のマニュアルではない．コンピュータの世界で“常識”とされている事柄を読み物ふうに懇切丁寧に解説している点に敬服する．その意味で本書は穏健（メーカー色のまったくない）かつ正確な用語集として使用することもできる訳である．

本書は原著 “Minicomputer Systems : Organization and Programming (PDP-11)”—Richard H. Eckhouse, Jr.—の翻訳で，主としてコンピュータ教育のテキストとしての用途を考えたものではあるが，内容そのものは必ずしもやさしくはない．——技術書一般に言えることだが——とくに演習問題を全部解いてみることはなかなかの骨折りである．やはり対象としては，まったくの初心者であればインストラクタが必要であり，またはFORTRAN や ALGOL をマスターしたうえでコンピュータの中身に興味をもっている人であろう．

というといかにも学校の教科書的な固い表現で埋めつくされているように思われるかも知れないが，前述の物語りふうと言った理由は，気の利いた訳注に負うところが大きい．私見ではあるが，翻訳物の価値はもちろん原著そのものにもあるが，訳者の“心”のほうが比重が大きいと思う（明治の文豪にも同じようなことを唱えた人もいたが）．訳文自体が読みやすく仕上っているうえに訳注を参照すると心和むことがある．このことから，演習問題を除けば電車の中で読むことも十分にできる訳である．

その訳注の中から一部紹介すると，

- コンピュータの具体例に，日本でなじみの多いものを追加している．

原著は若干古いせいか，今日わが国であまり見かけないシステムの名が数多く出てくる．これに対してわれわれの身近にあるシステムを追加することにより本書を非常に親近感のあるものにしている．

- 参考文献として邦文の推薦文献が載せられている．

原著にももちろん参考文献は各章ごとに付記されているが，一般読者にとっては特別な理由がないかぎり邦文のほうが有難い．

- 「1024のことを通常1Kという」（下巻 p. 149）

このように，コンピュータ屋の中で当り前に使っている言葉を含めて初めて“入門書”の要件を満たす．コンピュータ用語の閉鎖性に警鐘を鳴らす訳者の気持ちが伝わって嬉しい．

本書の構成としては，コンピュータの基礎，プログラミングの基礎や技法，データ構造とともに技術用語（スタック，ポインタ，フリップ・フロップ…）を解説しつつPDP—11のアセンブラを導入しているのが上巻で，入出力プログラミング，OS一般，システム・プログラムなどのアドバンスな内容の解説が下巻である．冒頭の“本書はミニ・コンのみを対象にしている訳ではない”ということの理由は，この構成からも想像できよう．

ただ，ひとつだけ苦言を呈することを許してもらえるならば，入門書として“コンピュータはこうして動かすんだ”ということは非常にわかりやすく解説されてはいるが汎用コンピュータとの相違点については明らかにされていない．もし，まったくの初心者が本書を読み進めていったとき，当節誌紙を賑しているオフ・コン，分散プロセッサまたは汎用コンピュータと何が違うのか，という疑問を抱くような気がする．なぜなら，元来“ミニ・コン”という概念そのものが明確でなく外観から分類してきたきらいもない訳ではなく，一方では汎用機もLSI技術などにより非常に小型化されているからである．とくに入出力制御の章にでも明解な訳注が入っていたら，と老婆心ながら思わずにいられない．しかし，ある程度の有知識者に対する“入門書”として出色のものであることに変わりはない．（平泉哲史　日本ユニバック）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．